

長野県における劣等児と特別教育に関する史的研究 (2) －明治30年代の児童の不良行為の要因と教育について－

中 嶋 忍*・河 合 康**

(令和元年8月29日受付；令和元年12月2日受理)

要 旨

本研究は、明治30年代前半における不良行為を行う児童への教育及び指導に関する考え方を探る目的で、中野の『不良少年の教育に就て』及び中島の『不良ナル児童ノ訓練ニ關スル研究』の2論文を基に、不良行為を行う児童への教育及び指導方法の研究に焦点を当てて検討した。その結果、不良行為は児童の生活環境が要因になっていることを指摘した。具体的には、次の点である。(1)不良行為の中でも乱暴行為は、白痴の一種に見られること。(2)不良行為の特性としては、12～15歳で性犯罪や詐欺などをする「早熟」と、精神障害者や重度精神遅滞者の一部が不良行為をする「未熟」があること。(3)精神状態は神経過敏・神経普通・神経魯鈍に分類され、特に神経魯鈍は指導が困難な者であるとしたこと。(4)保護者が子どもに間違った関わり方をする事。(5)家庭状況や友人関係が悪い状態であると無意識に不良行為が誘発されること。(6)身体的・精神的苦痛を伴う教育は、不正直な言動や自分勝手にひどい行動をもたらしこと。(7)貧困家庭は、極めて生活が困窮する中で、自然に自分を「劣っている者」と思う性格になってしまうこと。(8)両親や外界などの環境要因が良好な状態だが不良行為を行う児童は偶然的であるとしたこと。(9)これらの特性の児童を指導するには、環境を変える専門的施設が必要であり、そのために長野県に感化院の早期設立を求めたこと。

KEY WORDS

長野県 Nagano Prefecture 生活環境 living conditions 犯罪 crimes
不良行為 misbehavior

1 問題の所在と目的・方法

日本は、江戸時代の封建社会から欧米に追いつくために急激に近代化への転換を図った。これが明治政府の樹立であり、明治時代の幕開けであった。明治政府は富国強兵策を掲げて、国を発展させていくためには強い兵士を育成していかなければならないと考えた。そこで兵士育成は、文字どおり身体を鍛えることと共に、知能面においても向上させる必要があった。そのために政府は1872（明治5）年に学制を發布して、知識・学力の向上と日本国民としてのアイデンティティを育てようとした。この結果全国に学校（小学校）が建設され、多くの学齢児が就学した。当時就学率が高かったのは長野県で、特に旧筑摩県（1871－1876）の行った教育政策が功を奏した結果であった（中嶋・河合、2018）⁽¹⁾。

学齢児の就学が増える一方で、学力の差や生活態度などの問題が浮き上がってきた。そこで長野県内の小学校では、優等児と劣等児に分けて教育及び指導を行う取り組みが開始された。この取り組みは、松本尋常小学校と長野尋常小学校で明治20年代に開始されたものである。小学校では、学期末や学年末に試験が行われ、合格できないと落第になってしまった。したがって劣等児には、学習しても学力が向上しない者だけではなく、病気や家庭の事情による就学で休学したため試験に合格できない者もいた。また試験には「操行」というものがあり、日頃の生活態度も試験結果に加味された。この項目は、物への落書きや破壊、恐喝・窃盗・傷害などの犯罪をする児童を認定しない要因となった（中嶋・河合、2019）⁽²⁾。

犯罪を含む不良行為について信濃教育会の機関誌「信濃教育」では、長野県師範学校附属小学校教員であった小林要三郎と監獄医（現在の矯正医官）であった藤本慶太郎が明治20年代後半～30年代にかけての犯罪者の実態をまとめた（中嶋・河合、2019）。小林は、小学校教育の強化・改善によって児童の不良行為を減らすことができるとしていた。一方藤本は、犯罪者を調査した結果、低能者が含まれていたことを示した。また1902（明治35）年には、信濃教育会の会員であった中野節が『不良少年の教育に就て』⁽³⁾を、同様に中島與三郎が『不良ナル児童ノ訓練ニ關スル研究』⁽⁴⁾を記して、児童の不良行為に関して論じている（中嶋・河合、2013）⁽⁵⁾。

*無所属 **臨床・健康教育学系

本研究は、明治30年代前半における不良行為を行う児童への教育及び指導に関する考え方を探る目的で、中野の『不良少年の教育に就て』及び中島の『不良ナル児童ノ訓練ニ關スル研究』の2論文を基に、不良行為を行う児童への教育及び指導方法の研究に焦点を当てて検討した。また本研究は障害児教育の歴史研究であり、現在の社会的背景や教育理念などとは違う当時の考え方や用語については原語を用いた。

本文中の引用史料については、次のように表記した。史料中の漢字及び文字は原文どおり旧漢字を用いたが、一部の出力困難なものを常用漢字などとした。また仮名表記及びルビについては、原文のとおりにした。史料中の「◆」は、判別不能の文字を表した。史料の引用部には、引用ページ数を付記した。

2 不良行為を行う児童への教育

中野は『不良少年の教育に就て』の冒頭で、「不良少年ほど教育するに困難の事はない（中略）然しこれが段々と實効を奏して行く程又教育の中にて愉快はないのである今少しく此不良少年の教育に就て感したる所を記して見たい。」（中野[1902]25）と記しているように、不良行為を行う児童を教育することは困難な面があるが、教育によって不良行為が改善していくのはすばらしいことであると述べている。

中野は、不良行為を行う児童と処遇方法などについて次のように説明している。「不良少年とは讀んで文字の如くで不良の行為ある少年であつて夫れを其儘に爲して置くときは恐るべき國家の罪人と爲る」（中野[1902]25）と示しているように、不良少年とは文字どおり不良行為をする児童であるとして、そのまま放置しておくとならぬ重大な犯罪に手を染めてしまう可能性がある者と指摘している。そこで中野は、不良の児童を指導するための施設について諸外国の状況を見て、「歐米諸外國に於ては感化院或は授産學校を起して之れを收容シ教育し居る」（中野[1902]25）であるとして、感化院や授産學校を設立して教育を行っていると述べている。一方、日本については「我國にても三十三年三月九日感化法を發布して道廳及府縣に感化院を設置せねばならん事に成つたが函館神奈川其他一二ヶ所に設置及び計圖あるのみで在る」（中野[1902]25）と記すように、1900（明治33）年發布の感化法によって全国に感化院を整備することになったが、函館・神奈川とその他1～2箇所の設置やその計画があるのみだと指摘している。感化院の設置が進まない理由として中野は、「我國には取て以て模範とする感化院が無いと又一つには之れか經驗を有する人か無いと事業の困難とであるからである」（中野[1902]25）と記しているように、①運営の模範となる感化院が日本になく、②感化院で指導する経験のある人材がいなことが理由でこの事業を困難にさせていると述べている。

不良行為を行う要因として中野は、「不良少年は如何にして發生するが之れには勿論色々の源因がある、無教育もあるが第一は境遇である事は不良少年なるものを教育爲したる者の均しく認むる所である」（中野[1902]25）と示しているように、要因には諸説あって無教育もその一因であるが、境遇が一番の要因だと考えたと記している。中野は、次の3つが不良行為の要因であるとして掲げている。1つ目は「先天的遺傳に依るもの（即ち父母の性癖を繼承したるもの）」（中野[1902]25）である。次に2つ目は「後天的に境遇の不良なりによるもの（即ち家庭近隣町村の不健全なる空氣の裡に生育したるもの）」（中野[1902]25）である。最後に3つ目は「教育の方法を誤りたるもの（即ち家庭若くは學校に於て適宜の教育を與へられざりしもの）」（中野[1902]25）である。これらの要因に対して中野は、「之に依て見るも境遇の不正及び教育の錯誤になるので之れを如何にして教育せば完全に迄とは至らずともそれに近き結果を得るであろうか」（中野[1902]25）と記しているように、悪い境遇や間違つた教育の影響によって不良行為が起るものであり、どのようにして改善させることができるかと投げかけている。

不良行為ということについて中野は、「不良少年と云ふても必ず乱暴なる行為を爲すものとも限られない事は丁度白痴の一種に非常の乱暴を爲すのがある」（中野[1902]25）と記しているように、不良が必ずしも乱暴行為をするとは限らないと指摘している。その上で中野は、白痴¹⁾の一種に乱暴行為が見られるとしている。更に中野は、この特性を「早熟」と「未熟」に分けている。早熟は、次のような者であるとしている。1つ目は、「十二三歳にして男女の情あるもの」（中野[1902]25）という12～13歳で男女関係（性犯罪など）に関する行為をする者である。2つ目は、「十四五歳にして詐欺騙取に巧みな者」（中野[1902]25）とされる、14～15歳で詐欺などの犯罪を犯している者である。3つ目は、「十四五歳にして腕力丁年者を凌駕する者」（中野[1902]25）とあり、14～15歳で腕力が成人と比較してそれ以上の力がある者である。一方、未熟は「一見瘋癲白痴者の如き者」（中野[1902]26）と記され、一見して精神状態が正常でない者（瘋癲者）や重度の精神遅滞（白痴者）のような児童であると指摘している。これらの特性は「不良少年が其年齢の割合に早熟せると未熟なるとは諸種の不良行為を顕す重なる源因なる」（中野[1902]26）と記しているように、概念形成や精神年齢が実年齢に対して早熟か未熟かによって不良行為を示す原因になると指摘している。

不良行為を行う児童に立ち直る契機を与えるために中野は、感化教育の導入を主張している。不良行為の原因を改

善するには、「感化教育の要点は彼等が年齢よりも熟し過ぎたるを引き戻し後れたるを發達せしめ兩者共に相應の程度に於て發達せしむるにある」(中野[1902]26)と示しているように、実年齢に対して概念形成などが成長しすぎていたら年齢にあった状態に導き、実年齢よりも遅れていたら發達を促すことを行って、年齢相應の發達段階に導くことが感化教育の要点であると述べている。また中野は、これらの児童の精神状態を表1(中野[1902]26)のように過敏・普通・魯鈍の3つに分けている。それぞれの状態については、次のように説明している。1つ目の神経過敏は、器物破損や暴言、金銭を騙し取るなどを行う特徴を持ち、指導することで行為の改善が期待できるとしている。2つ目の神経普通は、特別な注意を払うことで行為が現れなくなるのが特徴で、監督・指導が可能な者であるとしている。3つ目の神経魯鈍は、常に監督・指導を行っても乱暴行為があるのが特徴で、監督・指導の効果が見られない者であるとしている。この精神魯鈍について中野は、白痴者に近いと指摘している。

しかしこれらの対象児は、「此悪少年を感化教育するには實に非常の困難を感ずるのである」(中野[1902]26)と示すように、指導(感化教育)を実施することか非常に困難であり、「第一の要点は境遇の轉換」(中野[1902]26)が必要であると指摘している。生活環境の改善(境遇の轉換)について中野は、「丁度脚氣患者が轉地養生を爲すか如くに惡家庭より善良なる家庭へ移さねばならぬ惡しき境遇より善き境遇に移さねばならぬ」(中野[1902]26)と記述している。脚氣²⁾などの病気の治療のために他の地で療養を行うように、感化教育も生活環境を移して最良の境遇の中で指導をしなければならないと述べている。そのために中野は、「感化院孤兒院の設けられて之れに收容する源因である」(中野[1902]26)として、感化教育の施設が長野県に必要であると述べている。そこで中野は感化院について、次のとおり述べている。施設の名称については「孤兒院感化院も設立組織の如何に依ては却て感化所でなく罪惡養成所の如くになつて仕舞のであるから設立者は注意せねばならん事である」(中野[1902]26)と記述しているように、感化所という名称では印象が悪くなってしまうので注意しなければならないとしている。刑務所収監の児童については、「監獄學者及司獄者の説に據るに少年(未丁年)時代から監獄に擊留された(或る一種の犯罪者を除きては)犯罪學上で最も恐る可き習慣的犯罪者と為つて如何に教誨して見ても功を奏しないと云ふ」(中野[1902]26)と示すように、未成年から刑務所に収監され、何度も犯罪を繰り返す習慣的な犯罪者になってしまうと、いくら教諭しても教育効果が上がらないことが司法関係者によって言われていると述べている。

長野県の少年犯罪について中野は、表2(中野[1902]26)のように示している。これによると明治32年度における人数は、男子が502人、女子が68人であると記している。この内再犯者は、男子101人(20.1%)、女子9人(13.2%)としている。同様に33年度は男子が530人、女子が49人とある。再犯者数は男子122人(23.0%)、女子9人(18.4%)であるとしている。また長野警察署管内で扱った男子の犯罪者数は、32年度に25人(県全体の5%)、33年度に40人(同7.5%)、34年度半期に27人であると記している。一方で女子は32年度に7人(同10.3%)、33年度に3人(同6.1%)、34年度半期に4人という結果を示している。犯罪行為をする児童について中野は、「縣下幾多の教育者諸氏之等の惡少年に對して如何に觀察せらるか」(中野[1902]26)と記しているように、不良や犯罪などを行う児童を惡少年と呼んで、これらの者をどのように指導などをしていくかが課題であると述べている。その上で中野は「一人の惡童は純良なる幾百の幼者を醜化す先覺者曰く犯罪の妻は尚バチルスの如し一人の遊民あれば十人の遊民を生ず十人あれば百人となる百人の波及する處は幾千万と云ふを知らずと今日犯罪者の年毎に増加は實に茲にあるのである」(中野[1902]26)として、個々の児童を適切に指導しないで放置しておけば、これらの行為が蔓延すると指摘している。

このような犯罪の対策について中野は、1856~1896年までのイギリスにおけ

表1 不良行為をする児童の精神状態の分類(原文抜粋)

第三種	第二種	第一種	不良少年
魯鈍	普通	過敏	神經
監督の要なき者	監督し得る者	監督し能はざるもの	
常に監督注意せずと雖も甚だしき暴行を將來に表はす者	不良の行為ありと雖も大差なき者但し特別に注意せされは時に怒る可き行為を將來に表はす者	器物を破壊し長者を罵詈謗し又は金銭を窃取する等の如し	

表2 明治32~34年度の長野県と長野警察署管内の少年犯罪件数(原文抜粋)

計	女	男	三十二年	卅三年	三十四年半年度
三十二名	七名	二十五名	四十名	二十七名	
四十三名	三名	四十名			
三十一名	四名	二十七名			

此恐る可き未丁年者の犯罪者も我長野縣にて三十二年に於て男五百二人女六十八人已上再犯者が男百十一名女九名三十三年男五百三十人女四十九人已上再犯者男百二十二女九人又長野警察署にて取扱ひたる未丁年者の犯罪数は

る犯罪数の減少を参考に示している。これによると10年ごとの統計で、「千八百五十六年 一万三千九百八十人」(中野[1902]26),「全六十六年 九千三百五十六人」(中野[1902]26),「全七十六年 七千三百三十八人」(中野[1902]26),「全八十六年 四千九百二十四人」(中野[1902]26),「全九十六年 一千四百九十四人」(中野[1902]26)であると述べている。1860年代で約4600人減らし, 70年代・80年代で約2000人, 90年代で約3400人減少したことがわかる。この減少対策に中野は,「恐る可き勢を以て減少したるは全く不良行為の感化の道の具備にあり英國本土のみで二百七十余ヶ所も感化院にて男女三万人足らずを感化せし結果である」(中野[1902]26)と記しているように, イギリスに約270箇所の感化院を設置して男女児童約30000人に対して指導などを行った結果であると指摘している。一方で中野は, 日本の状況について「我國での感化院は僅かに指を折るに過ぎずして収容児童總計二百に足らず教育家は須く此問題に注意を願いたいのである」(中野[1902]27)と示していて, 全国の数箇所を合わせても収容総人数が200人足らずであることから, 感化院の状況に危機感を持つべきであると訴えている。したがって「不良少年又は孤貧児の教育は其如何に依ては國家に幾多の被害を与ふるが計れざるものあり」(中野[1902]27)として, 犯罪を含めた不良行為や孤児・貧困の児童への教育を軽視すると将来の社会問題につながってしまうと主張している。このように中野は, 長野県における不良行為などをする児童への特別教育及び指導の必要性を論じている。

3 不良行為を行う児童への指導方法の研究

3. 1 不良行為の要因と改善策

中島は, 不良行為を行う児童に対しての指導について論じている。これは冒頭で「訓練上ノ事ハ中々困難ナルモノデゴザイマシテ從テ其方法モ種々アリマスケレド就中不良ナル児童ヲ教化スルコトハ實ニ至難ノ事業ト考ヘマス、」(中島[1902]1)と記しているように, 一般の児童を指導することは困難を伴い, 方法もいろいろとあるが, 特に不良行為を行う児童への教育及び指導はとても難しいことであると述べている。この教育に対して中島は「果シテ此事業ガ困難ナルナラバ御同様教育ニ身ヲ委ネテ居リマスモノハ共同的ニ之ヲ研究シテ成ルベク、ヨク多ク、効果ノ舉ル様ニ致シタイモノデゴザイマス」(中島[1902]1)と示しているように, 同様の教育に携わる者に共同的研究を行って教育効果が出るようにするために意見を呼びかけている。また中島は「私ハ多年此不良児童ノ訓練上ニ付テ大ニ困難ヲ感ジテ居ルモノデアリマスカラ甚ダ皮相ノ考デハアリマスガ今日迄研究致シマシタ事柄ニ付テ聊カ卑見ヲ述ベ」(中島[1902]1)として, 長期にわたって指導の困難さを感じていて, うわべだけの考えではあるがこれまで研究したことを示したいと述べている。

中島は「私ハ之ガ研究ヲナスニ先チテ此等不良ノ児童ハ如何ナル境遇ニアルモノガ比較的ニ多イカト云フヲ調べタ」(中島[1902]1)と記しているように, 不良行為の要因が児童の生活環境(境遇)にあるとして, この理由を調査したと述べている。その結果について, 中島は表3(中島[1902]1)のように10項目の理由を示している。環境要因は, ①両親や家庭・居住状態に関するもの, ②友人に関するもの, ③教育状態に関するもの, ④身体的・知的・精神的などによるもの, ⑤突発的なものに整理している。更に中島は「右ノ境遇ニアルモノハ何故ニ斯ク不良ナル品性ヲ有スルニ至リマシタカニツイテ調べマシタ」(中島[1902]1)と示し, 不良行為の要素を説明している。これによると両親及び保護者に関するものは「第一、第二、ノ境遇ニアルモノハ教育ノ要素タル眞ノ愛テフ、温ナル教育ヲ受ケザリシ事並ニ父母ガ子供ノ取扱ヲ不公平ニセシ爲メ執拗、猜忌、残忍、疑懼、不正直等ノ惡徳ヲ備フルニ至リシ様デアリマス」(中島[1902]1)と記しているように, ①真の愛情やぬくもりという教育の要素を持った家庭教育を受けていないこと, ②両親及び保護者が子どもに対して誤った関わり方をした結果であると指摘している。この関わり方によって子どもは, 自分勝手であったり, 何かに対してねたんできったり, 残忍であったり, 何かを疑って恐れたり, 正直ではなかったりなどの性格になってしまうと指摘している。そこで中島は「私ハ此ニ至テ彼ノ感化院並ニ養育院等ニ於テ不良少年ヲ教育スルニ全ク家族的組織ニシテ教師ハ恰モ慈母ノ如キ满腔ノ愛情ヲ注ギテ感化シツ、アルヲ思ヒ出シテ、轉タ感慨ノ情ニ堪ヘマセン」(中島[1902]1-2)と記して, 感化院や養育院

表3 不良行為を引き起こす要因(原文抜粋)

一、實父母ノ無キモノ	二、両親ノ中何レカ其一人ヲ失セシモノ(即チ繼父母ニ育テラレシモノ)	三、家庭不良ノモノ	四、居住ノ關係ヨリ惡風ニ感染セシモノ	五、不良ナル朋友ニ感化セラレシモノ	六、過酷ナル教育ヲ受ケシモノ	七、愛ニ溺レテ我儘ニ育テシモノ	八、赤貧ノ中ニ養成セラレシモノ	九、生理的原因ニ由レルモノ	十、偶然的ノモノ
------------	-----------------------------------	-----------	--------------------	-------------------	----------------	-----------------	-----------------	---------------	----------

などで不良行為をする児童を教育・指導する必要があると述べている。また中島はこの施設で、教員が母親のような愛情を注ぐという家庭の組織の中で指導を行うことを主張している。次に生活環境に関することについて中島は、「第三、第四、第五の場合ニ於ケル児童ハ外界ノ示例惡シキガ爲メ常ニ之ヲ模倣スルニ由テ知ラズ◆ノ間ニ惡風ガ感染スル様ニナリマス」(中島[1902]2)と示しているように、児童の置かれている家庭状況や友人関係に悪影響があつて、これを真似ることによって無意識に身に付いてしまうと述べている。教育に関することは「第六ノ過酷ナル教育◆ナストキハ責罰ヲ恐ル、ノ極、不正直ノ言行ヲナシ且ツ前ニ述ベシ執拗、殘忍等ノ氣風トナルニ至リマス」(中島[1902]2)と記していて、身体的・精神的苦痛を与えて教育することが児童に責罰を植え付けて不正直な言動になり、自分勝手やひどい行動をする人間になると指摘している。家庭の養育方法に関して中島は、「第七ノ愛ニ過グレバ児童ハ何事モ只意ノマ、ニ行ハントスルヲ以テ遂ニ長上ノ命ヲ遵奉スルコトナク放縱ニ流レ秩序ヲ守ラヌ我儘者トナリ果テル様ニナリマス」(中島[1902]2)と示しているように、甘やかしすぎることで自分の意のままに行動するようになったり、年長者に対して失礼な態度をとったりと秩序を無視するわがまま者になるとしている。貧困家庭に関しては「第八ノ赤貧ニ養育セラレモノハ其父母生活上ノ困難ナルヨリシテ常ニ座右ニ愛兒ヲ置キテ充分ナル教育ヲナスコトノ出来ナイト又一ツニハ食物其他玩具及ビ學用品等ヲ供給スルコトガ出来ナイガ爲メ自然ニ賤劣ナル性格ヲ備フル様ニナルノ例ハマ、アルコトデゴザイマス」(中島[1902]2)としていて、極めて生活が困窮している中で養育される児童は自然に自分を「劣っている者」と思う性格になってしまうことがあると述べている。これは、保護者が常に児童に十分な教育を行うことが難しいこと、また食べ物・おもちゃ・学用品などが用意できないことからすると中島は指摘している。身体的・知的・精神的などを起因とする問題について中島は、「第九ノ生理上ノ原因ヨリ來リタルモノハ心身ノ諸器關ノ中ニ欠損スル處アルカ又ハ或ル局部ガ過敏ナル等ノ爲メ病的ニ惡ヲナスニ至ル事ガアリマス」(中島[1902]2)と記しているように、①心身に何らかの問題があること、②心身の一部の機能に過敏に反応するものがあること、のために病的に不良行為を起こすことがあると指摘している。このことについて中島は、次の2点について説明している。1つは「神経系統ノ過敏ナルガ爲メ感情自ラ激烈トナリテ惡事ヲ働クコト若シクハ打破動機ノ盛ニナルコト等ハ、マ、見ルトコロデアリマス」(中島[1902]2)と示しているように、神経過敏による不良行為であるとしてよく見られることとしている。もう1つは「白痴ノ一種ニシテ病的ニ惡事ヲナスモノモアリマス」(中島[1902]2)として、白痴に近いものによって病的に不良行為を行うと述べている。これらについては「是レ等ハ多ク生理的ノ作用ヨリ來リタルモノデアロト思ヒマス」(中島[1902]2)と、身体の生理的作用によるものが多いと指摘している。最後に偶然的な不良行為については、「第十偶然的ノモノ即チ兩親ノ性格モ善ク且ツ外界ノ境遇モ比較的不良ナラザル場處ニ於テ成長セン児童中ニモ偶々不良ノ性質ヲ備フルコトヲ發見シマス」(中島[1902]2)と記されているように、両親や外界などの環境要因が良好な状態であるのに不良行為を行う児童がいると指摘している。このような児童について中島は、次のように示している。これは、「之ハ或ル心理學者ナドノ唱フル處ニ由リマスレバ妊娠當時ニ於ケル兩親ノ有シテ居ツタ精神作用ガ影響シテ居ルノデアルト申サレマスガ尚其外ニ前ニ述ベマシタ複雑ナル原因ヲ有シテ居ルノデアロト思ヒマスガ之ハ未ダ疑問ニ属シテ居リマス」(中島[1902]2-3)として、母親の妊娠中に両親が有していた精神疾患の影響により児童の不良行為が現れたという心理学者の見解に対して、上記の要因が複雑に関係してこの行為を引き起こすと中島は考えているが、当時の時点では解明されていないとしている。

不良行為を改善するために中島は「之ヲ救済スルノ策ハ如何致シタナラバ宜敷カロト段々攻究シテ見マシタ」(中島[1902]3)と示し、どのような指導方法があるのか考えてみたことと記している。これは「第一ニ各ノ境遇並ニ稟賦等ヲ能ク調査シテ之ニ適應セル方法ヲ取ルヨリ致シ方ガナイト信ジマス」(中島[1902]3)であるとして、児童の生育環境や生まれ持った性格などをよく調査してその状態に応じた方法を探るしかないと指摘している。これについて中島は「其方法ノ彼等ヲ收容スル特別ナル教育場ヲ設ケテ特段ナル教育ヲ施スガ最モ良好ノ策デアリマセウガ今日ノトコロデハ彼ノ感化院ノ如キモノ各地ニ其設ケナキガ故」(中島[1902]3)と記しているように、児童を收容して特別教育及び指導を行うことが最良の策であるが各地に感化院のようなものがないと述べている。そこで「目下學校ニ於テ取ルベキノ策」(中島[1902]3)として、学校において実施可能な方法を説明している。方法の1つは教員の役割について「先づ家庭ト聯絡ヲ通ジテ教師ハ其両親並ニ保護者ニ對シテ児童教育上ノ指導者トナリ又善キ相談相手トナツテ漸々保護者ヲシテ今迄取り來リシ誤謬ナル点ヲ改良セシムル様ニ注意シ」(中島[1902]3)と示して、対象児の家庭と連携して保護者に家庭教育上の指導や良き相談相手となることで、今まで間違っていた点を改善させるようにすることであると指摘している。もう1つは手段の確立について「或ハ教育會談話會ヲ開キ或ハ青年教育ニ力ヲ盡シテ風俗改良ヲ計リ又教師自身ニ於テモ其原因ニ由リテ適當ナル教育手段ヲ攻究シテ感化スル等ハ差當リ良策ト考ヘマス」(中島[1902]3)と記しているように、①信濃教育会においても検討すること、②青年教育を通して社会の乱れなどを正しい方向に戻すために尽力すること、③教員自身でも適切な方法を見出すことなどを行うのが良い策であると指摘している。

3. 2 児童への対策と指導

対象児への対策として中島は、保護者の問題・生活困難の問題・児童の病的に関する問題について例を示している。1例目の「愛ノ欠乏ヨリ原因セシ者ナラバ教師ハ家庭ニ向テ懇切ニ注意ヲ與フルハ勿論又彼ノ児童ニ對シテハ充分ニ同情ヲ寄セテ愛撫シ或ハ時々教師ノ自宅ヘ呼ビ寄セテ色々面白キ話ヲ聽カシメ或ハ散歩ニ連れ行ク等ノ事ヲナスモ一方便デアロト思ヒマス」(中島[1902]3)は、保護者の愛情が足りない児童についてである。この対策は、教員として家庭訪問を行って保護者に理解できるように説明することと、教員は十分な同情心を持って児童を愛撫したり自宅に招いて楽しい話をしたり散歩に誘ったりすることが方法の一つと述べている。2例目について「赤貧ナルガ爲メニ彼等ニ供給スルモノ、(例ヘバ學用品ノ如キ)不充分ナルモノニ對シテハ特別ナル救助法ヲ設ケ(後略)」(中島[1902]3)のように記していて、児童が学校生活を送る上で学用品などが不十分な場合には特別法を創設して支援する対策が必要であると指摘している。3例目は「病的ニ不良ナル行爲ヲナスモノニ對シテハ學校醫トモ相談シテ相當ノ治療法ヲ攻究シ且ツ一面ニハ感情過敏ニ失スルガ如キ児童ナレバ教師ハ沈着ナル体度ヲ以テ之ニ接シ、家庭ニ於テモ餘リニ感情ヲ動かサシメザル様ニ注意ヲ與ヘ尚放縱ナル生徒ニ對シテハ少々嚴格ナル体度ヲ取り漸次從順ニ導キ秩序ヲ守ルノ習慣ヲツクル等ハ必要ナル事ト考ヘマス」(中島[1902]3)と示している。病的状態で行為を行う児童に対しては、学校医と相談して適切な治療を受けさせる必要があると述べている。この対策として中島は、感情が過敏になっている児童に対して落ち着いた態度で対応して、保護者に対しては家庭でも感情を刺激しないように忠告することを教員として行動をするようにとしている。そのためには、わがまま(自分勝手)な児童に対しては厳格な態度を示し、時間をかけて他人とも協調できるように指導し、秩序を守る習慣を身に付けさせることも教員の役割であると指摘している。

これら児童への指導について中島は、全体に共通するものとして次のことを指摘している。1つは「一方ニハ児童ノ自重心ヲ充分養成スル事ニ注意シテ彼等ノ長所ヲ發見シ皮シクハ善良ノ行爲アリシ時ハ其好時期ヲ逸セズシテ直ニ賞賛ノ言葉ヲ與ヘテ之ヲ獎勵シ漸次善ヲ樂シムノ習慣ヲ養成シ遂ニハ善ヲナスハ人間トシテノ本文タルヲ悟ラシムル様ニ指導シ(後略)」(中島[1902]3)と記しているように、児童に自身の行為を慎む心(自重心)を育てさせることが重要であると述べている。そのためには、対象児の長所を見つけて善い行為をした時が慎む心を育てる好機であるとしている。加えてこの行為を行った時に賞賛する言葉掛けをすることで、徐々に善い行為を行うことが楽しくなる習慣を身に付けられるようになると説明している。中島は、このように教員が対象児に指導するようにと指摘している。もう1つは「一面ニハ惡ヲ未萌ニ妨グノ策ヲ取り即チ惡ヲナスノ機會ヲ豫メ除去シ置クコト並ニ之レ等ノ児童ヲ時々教師ノ許ニ呼ビテ(惡ヲナシタル時ノミニ限ラズ)懇切ニ訓諭スル等ノ策ヲ取ルハ大ニ効驗ガアルヲ信ジマス」(中島[1902]3)と示していて、教員が不良行為につながる機会をなくすとともに、日頃から対象児に教諭などを行うことで効果が出ると記している。ただしこれらの指導を行う上で「尚此ニ注意スベキヲハ児童ノナセル惡事ハ果シテ惡意ヨリ出デシモノナルヤ否ヤヲ究メルヲモ亦必要デアリマス」(中島[1902]4)と記しているように、児童の行為が悪意から起こしたものか他の要因からのものなのかを見極めることも必要であると指摘している。

このように教育及び指導を行うために中島は、「何レニ致シテモ前ニ述ベシ通り特別ノ教育場ガナケレバ獨リ彼等ニ、特別ナル充分ノ感化ヲ與ヘルヲガ出來ナイノミナラズ他ノ善良ナル児童ニモ大ニ影響ヲ及ボス次第デアリマスカラ之レハ實ニ等閑ニ付スベカラザル重大ノ事業デアリマス、」(中島[1902]4)と記しているように、専門の施設が必要であると指摘している。具体的な理由は、次のとおり示されている。1つは、特別な施設でなければ十分な特別教育を行うことが難しいとしている。もう1つは、対象児を通常の学校で一緒にすることは他の児童に影響を与えてしまうとしている。これらの理由から特別な専門施設は、対象児の教育及び指導を行っていく上で重要なものであると述べている。したがって中島は、「宜シク縣ノ事業トシ或ハ教育會ノ事業トシテ充分ナル取調ヲナシテ適當ナル方法ガ實際ニ行ハレル様ニナツテ彼ノ可憐ナル児童ニ慈涙ヲ注ギ之ヲ救済スル事ノ出來ル様ニ致シタイモノデアリマス」(中島[1902]4)と示して、長野県や信濃教育会に対して適切な教育及び指導を実行することができるよう調査を実施するように求めて、対象児の救済を可能にしようと考えている。この特別施設、つまり感化院の設置について中島は「承ル處ニ由レバ既ニ各所ニ於テ感化院ノ設立ヲ見ル様ニナリ尚最近ニ於テモ神奈川、千葉ノ兩縣ノ如キハ最早此事業ニ着手セラレツ、アルト申スヲデアツテ教育上實ニ喜バシキ現象デゴザイマス、何卒本縣ニ於テモ此事業ニ着手セラル、日ノ近キニアラン事ヲ併セテ懇望スル次第デアリマス」(中島[1902]4)と記しているように、他県では設置の動きが進んでいて、特に神奈川・千葉の両県がいち早く取り組んでいると指摘している。これらを踏まえて中島は、長野県でも早期に感化院の設置をして特別教育の開始が可能ないように切望していたことが分かる。

4 まとめ

本研究は、明治30年代の長野県における犯罪などの不良行為を行う児童の実情とその教育及び指導の考え方を解明することを目的とした。その結果、以下の点が明らかになったとともに、今後の課題が示された。

4. 1 不良行為を行う児童の教育について

不良行為を行う児童を教育することについて中野は困難な面があるが、教育によって不良行為が改善していくのはすばらしいことであるとした。こうした児童については、そのまま放置しておくとは重大な犯罪に手を染めてしまう可能性がある者と指摘した。そこで中野は諸外国の状況を調べて、感化院や授産学校を設立して教育を行っていることを示した。これに対して日本は、1900（明治33）年の感化法発布で全国に感化院を整備することになったが、函館・神奈川とその他1～2箇所での設置やその計画があるのみであると指摘した。これが進まないことに関して中野は、運営の模範となる感化院が日本にないことと、感化院で指導する経験のある人材がいまいことが理由で困難になっていると指摘した。

不良行為の要因に関して中野は、無教育もその一因であるが、児童の置かれている境遇が一番の要因であると述べた。この要因とは、1つ目に先天的遺伝によるもの、2つ目に不健全な環境によるもの、3つ目に適切な教育を受けていないものの3要因であるとした。この3要因に対して中野は、悪い境遇や間違った教育の影響によって不良行為が起るものであり、どのようにして改善させることができるかと投げかけた。

中野は、不良行為ということが必ずしも乱暴行為をすることとは限らないと指摘した上で、乱暴行為が当時学校教育の対象外になっていた白痴の一種に見られることを示した。この特性に関して中野は、①12～13歳で男女関係（性犯罪など）に関する行為をする者、②14～15歳で詐欺などの犯罪を犯している者、③14～15歳で腕力が成人と比較してそれ以上の力がある者、の3者を「早熟」とした。これらに対して、一見して精神状態が正常でない者や重度の精神遅滞のような児童は、「未熟」と分類した。

対象児を指導するために中野は、感化教育の導入を主張していた。この感化教育とは、実年齢に対して概念形成などが成長しすぎていたら年齢にあった状態に導き、実年齢よりも遅れていたなら発達を促すことを行って、年齢相応の発達段階に導く教育であると述べた。中野は、この児童の精神状態を神経過敏・神経普通・神経魯鈍の3つに分けた。神経過敏は、器物破損や暴言、金銭を騙し取るなどを行う特徴を持ち、指導することで行為の改善が期待できるとした。神経普通は、特別な注意を払うことで行為が現れなくなるのが特徴で、監督・指導が可能な者であるとした。神経魯鈍は、常に監督・指導を行っても乱暴行為があるのが特徴で、監督・指導の効果が見られない者であるとし、白痴者に近いと指摘した。

しかし通常の生活の中では、感化教育を実施することが非常に困難であると指摘した。そのため中野は、対象児が置かれている生活環境を改善する必要があるとした。生活環境の改善は病気のための転地療養のように、感化教育も環境を移して指導をしなければならぬと述べた。中野は、この教育を行うために感化院などの施設が長野県にも必要であると主張した。そして感化院に関して、「感化所」という名称では印象が悪くなるので注意すべきであるとした。また刑務所収監の児童に関しては、未成年から刑務所に収監され、何度も犯罪を繰り返す習慣的な犯罪者になってしまうと、いくら教諭しても教育効果が上がらないことが司法関係者によって言われていると指摘した。

4. 2 不良行為を行う児童への指導方法の研究について

4. 2. 1 不良行為の要因と改善策について

中島は長期にわたって不良行為をする児童への指導の困難さを感じ、教育に携わる者に共同的研究を行って教育効果が出るようにするために意見を呼びかけた。この一端として中島は、これまで研究したことを示したいと述べた。

こうした対象児に関しては、不良行為の要因が児童の生活環境（境遇）にあると中島も中野と同様の見解を示した。1つ目に両親及び保護者に関しては、①真の愛情やぬくもりという教育の要素を持った家庭教育を受けていないこと、②両親及び保護者が子どもに対して誤った関わり方をした結果であるとした。2つ目に生活環境に関しては、児童の置かれている家庭状況や友人関係に悪影響があって、これを真似ることによって無意識に身に付いてしまうとした。3つ目に教育に関しては、身体的・精神的苦痛を与えて教育することが児童に責罰を植え付けて不正直な言動になり、自分勝手やひどい行動をする人間になるとした。4つ目に家庭養育に関しては、甘やかしすぎることで自分の意のままに行動するようになったり、年長者に対して失礼な態度をとったりと秩序を無視するわがまま者になるとした。5つ目に貧困家庭に関しては、極めて生活が困窮している中で養育される児童は自然に自分を「劣っている者」と思う性格になってしまうことがあるとした。6つ目に身体的・知的・精神的などを起因とする問題に関して

は、①心身に何らかの問題があること、②心身の一部の機能に過敏に反応するものがあること、のために病的に不良行為を起こすことがあるとした。7つ目に偶然的な不良に関しては、両親や外界などの環境要因が良好な状態であるのに不良行為を行う児童がいるとした。

不良行為の改善に関して中嶋は、児童の生育環境や生まれ持った性格などをよく調査してその状態に応じた方法を探るしかないと指摘した。そのためには、児童を収容して特別教育及び指導を行うことが最良の策であるが各地に感化院のようなものがないと述べた。そこで中嶋は、学校で実施可能な方法として教員の役割と手段の確立を示した。教員の役割に関しては、対象児の家庭と連携して保護者に家庭教育上の指導や良き相談相手となることで、今まで間違っていた点を改善させるようにすることであるとした。手段の確立に関しては、①信濃教育会においても検討すること、②青年教育を通して社会の乱れなど正しい方向に戻すために尽力すること、③教員自身でも適切な方法を見出すことなどを行うのが良い策であるとした。

4. 2. 2 児童への対策と指導について

中嶋は、対象児への対策に関して保護者の問題・生活困難の問題・児童の病的に関する問題について例を示した。保護者の問題とは愛情が足りない児童で、教員として家庭訪問を行って保護者に理解できるように説明することと、教員は十分な同情心を持って児童を愛撫したり自宅に招いて楽しい話をしたり散歩に誘ったりすることが対策であるとした。生活困難の問題については、児童が学校生活を送る上で学用品などが不十分な場合には特別法を創設して支援する対策が必要であるとした。児童の病的に関する問題については、病的状態で行為を行う児童に対して学校医と相談して適切な治療を受けさせる必要があるとした。その上で感情が過敏になっている児童に対して落ち着いた態度で対応して、保護者に対して家庭でも感情を刺激しないように忠告することを教員として行動をするようにと指摘した。また、わがまま（自分勝手）な児童に対しては厳格な態度を示し、時間をかけて他人とも協調できるように指導し、秩序を守る習慣を身に付けさせることも教員の役割であるとした。

これら児童への指導に関して中嶋は、児童に自身の行為を慎む心（自重心）を育てることか重要であると述べた。そのためには、対象児の長所を見つけて善い行為を行った時が慎む心を育てる好機であるとして、この行為を行った時に賞賛の言葉掛けをして徐々に善い行為を行うことが楽しくなる習慣を身に付けられるようになるとした。もう1つは、不良行為を未然に防ぐことであると述べた。これは、教員が不良行為につながる機会をなくすとともに、日頃から対象児に教諭などを行うことで効果が出るとした、ただし中嶋は、指導する上で児童の行為が悪意から起こしたものか他の要因からのものなのかを見極めることも必要であると指摘した。

以上のように対象児の指導に関して中嶋は、特別な施設でなければ十分な特別教育を行うことが難しく、対象児を通常の学校と一緒にすることは他の児童に影響を与えてしまうために、専門の施設が必要であると指摘した。そのためには、長野県や信濃教育会に対して適切な教育及び指導を実行することができるよう調査を実施するように求めて、対象児の救済を可能にしようと訴えた。最後に中嶋は施設の設置が他県では進んでいて、長野県でも早期に感化院の設置して教育の開始が可能となるように切望した。

4. 3 今後の課題について

今後は、長野県における社会的な問題行動や犯罪などを犯した児童への教育及び指導の実践・研究に関して明らかにすることが課題として残された。

注

- 1) 白痴は、現在の重度知的障害に当たると考えられるもの。
- 2) 脚気（かっけ）は、体内のビタミンB₁の欠乏による病気のことである。

謝辞

本研究に関して安曇野市中央図書館の皆様には、史料の複写など多大なご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

文献

- (1) 中嶋忍・河合康（2018）長野県における劣等児に対する取り組み－松本尋常小学校の場合－. 中村満紀男（編著）日本障害児教育史（戦前編）. 明石書店, pp.248-259.

- (2) 中嶋忍・河合康 (2019) 長野県における劣等児と特別教育に関する史的研究－明治20～30年代の劣等児と犯罪について－. 上越教育大学研究紀要, 38(2), pp.355-363.
- (3) 中野節 (1902) 不良少年の教育に就て. 信濃教育會雑誌, 第百九十四號, pp25-27.
- (4) 中島與三郎 (1902) 不良ナル兒童ノ訓練ニ關スル研究. 信濃教育會雑誌, 第百八十六號, pp.1-4.
- (5) 中嶋忍・河合康 (2013) 明治時代の雑誌「信濃教育」における特別教育の対象児童に関する研究論文の概要. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 19, pp.7-11.

A Historical Study of Poor-performing Students and Special Education in Nagano Prefecture (2): The Causes of Children's Misbehavior and Education, 1897–1906

Shinobu NAKAJIMA* and Yasushi KAWAI**

ABSTRACT

In order to seek out the ways in which education and guidance for misbehaving children were conceptualized during the first half of the decade 1897–1906, this study considered two papers by Nakano, “Educating juvenile delinquents” and “A study of disciplining delinquent children,” both of which focus on education and guidance methods for misbehaving children. Nakano identified children's living conditions as the main cause of misbehavior. The specific findings of these papers are (1) Among types of misbehavior, violent acts were considered a type of idiocy; (2) Misbehavior was characterized by “precocity,” in which children aged 12–15 years engaged in acts such as sexual crimes and fraud, and “immaturity,” in which those with mental disabilities or severe mental retardation engaged in misbehavior; (3) Psychological conditions were categorized as oversensitivity, normal sensitivity, and insensitivity, and it was considered especially difficult to provide guidance to those suffering from insensitivity; (4) Guardians interacted with children in incorrect ways; (5) Children were led to misbehave unconsciously in cases where family situations or relationships with friends were poor; (6) Education involving physical or emotional pain led to dishonest speech and behavior, or to selfish and cruel acts; (7) In households experiencing severe poverty, children tended to develop personalities in which they thought of themselves as inferior to others; (8) Children who misbehaved despite positive environmental factors, such as supportive parents or the wider world, were considered chance occurrences; (9) A specialized facility was needed to provide a suitable environment and guidance for children with these properties. For this reason, it was recommended that Nagano Prefecture quickly establish a reform school.

* independent ** Clinical Psychology, Health and Special Needs Education